

はじめに

1976年に始まったわれわれの共同研究体制は、現在、世代交代の時期に入っている。2006年の早川武彦教授に続き、2008年には藤田和也教授が定年退職され、そして今年（2009年）の春には高津勝教授、内海和雄教授がご退職された。高津・内海両教授は、これまで本学のスポーツ科学研究を牽引されてきただけでなく、スポーツ社会学の分野において、常に批判的な立場からスポーツに纏わる社会現象を分析し、また、スポーツという視点でもって社会に鋭く切り込んでいくという研究スタイルを貫かれてきた。その集大成として上梓された著書である『スポーツ社会学の可能性 - 歴史・身体・社会を探る』（高津勝著、創文企画、2008年）、『スポーツ研究論 - 社会科学の課題・方法・体系』（内海和雄著、創文企画、2009年）は、われわれ後輩の研究者に、スポーツを社会科学的にとらえる方法論を指し示すだけでなく、常にチャレンジをしていく研究姿勢をもつことの大切さを伝える、叱咤激励の書となっている。お二方のますますのご活躍を期待すると同時に、われわれもそれに負けない研究を続けていかなければならないと強く決意する次第である。

さて、『一橋大学スポーツ研究 2009』のテーマは「グローバル化下のスポーツとコミュニティ」である。昨年の本年報刊行の時期には「リーマン・ショック」が起り、世界同時不況の中、この一年間、「スポーツ」や「コミュニティ」にもさまざまな影響が出てきている。スポーツイベントやスポーツ・チームのスポンサーから撤退する企業が相次ぎ、バブル崩壊以降、「地域」を受け皿として新たな形を模索してきたスポーツ・クラブやスポーツ・チームの経営は非常に苦しい状況に立たされている。また、「派遣切り」に象徴される雇用の不安定化は、セーフティー・ネットとしての地域コミュニティの役割の強化を求めるようになっている。世界の遠く離れた場所で起きた出来事がローカルな生活世界を一変させるといった、まさにグローバル化を実感する一年を経験したわれわれは、複雑に絡まり合う、政治・経済・社会・文化の中の現象を分析するために、これまで以上に広く、深い研究を行わなければならないと感じている。幸い、大規模な世代交代の過程にある一橋大学は、野心的な研究者を新たに迎え入れている。今年の4月には坂上康博教授、中澤篤史講師が、われわれの共同研究のメンバーとして加わることとなった。新たな研究体制のもと、学外・学内の研究者との交流を活発に行い、ダイナミックに変動する社会を読み解く視点を養っていきたいと考えている。本誌がそのような共同研究の契機となることを心から期待したい。

2009年9月27日

一橋大学スポーツ科学研究室室長 岡本 純也